

くも膜下出血とは？

くも膜下出血は前触れもなく突然激しい頭痛、吐き気、嘔吐が起こり、そのまま意識を失うことが多い疾患です。頭蓋骨の下には、くも膜という蜘蛛の巣のような薄い膜があります。その内側に脳があります。脳の中に血液を送る血管がこのくも膜の下を通っています。この血管にこぶ（動脈瘤と言います）や動脈硬化が生じると、血圧が高くなった時に急に破裂します。出血は脳の表面であるくも膜の下に溢れるため、その出血量が多ければ多いほど脳が圧迫され、脳が壊されていくことになります。くも膜の下で出血が起こるので、くも膜下出血と言います。出血が少なければ意識は回復しますが、出血量が多い場合や、脳内に血液が流れ込んだような場合には、死に至るケースもあります。くも膜下出血は脳卒中に分類されますが、脳梗塞や脳出血とは障害が生じる機序が異なります。脳梗塞や脳出血では脳血管の破城で脳の組織が脳内部で自ら壊れてしまいます。一方でくも膜下出血は脳の表面の出血で脳外部から脳組織を破壊します。そのため頭部外傷と同様の病態になります。

